

国連ミレニアム開発目標をラオスで学ぶ

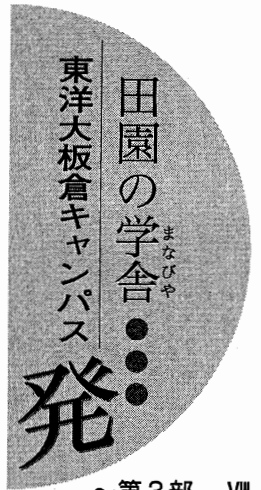
国際地域学部国際地域学科3年

渡辺美由紀、沼田愛

(下)



田んぼが広がるのどかなラオスの農村風景



～第3部 VII

前回は国連機関であるFAOの活動の一端に触れました。今回は独立行政法人国際協力機構(JICA)のラオス事務所

として日本のNGOであるシャティ国際ボランティア会(SVA)のプロジェクトについて述べたいと思います。日本政府はラオスに対する援助国の中でもトップドナーにたつていて、多様な支援を行っています。ラオスJICAはその中心を担っており、農業保健、教育など多方面で事業を行っています。

とりわけ農業支援は就業人口の8割が農林業に従事し、農林業がGDPの5割を占めるラオスでは、人々の生活に大きな効果を与えるものです。ラオスには豊かな自然資源があり、また農村社会は高い相互扶助能力を持っています。この強みを生かしながら、持続的な発展を目指すわけですが、農業ばかりでなく実情に応じた行政能力の向上も図りながら、協力は行われています。

具体的には環境維持の観点から

相互扶助能力高い農村

収入より食生活の改善

ら焼き畑を減らし、代替えの仕事に住民と専門家が一緒に考えていくプロジェクトがあります。今回は焼き畑に代わるものとして、現地の人々を中心となつて続けている魚(テラピア、コイ、ナマスなど)の養殖現場を見学しました。

これらの魚は成長が速く、かつラオスの人々の嗜好にも合っているため、市場にすぐに出荷することができます。しかし、池を所有していても、養殖の知識を持たないために、遊ばせているケースもまだまだ多いそうです。JICAは巡回指導チームをつくり、現地の人々を確かめながら、養殖の技術指導を行っています。

このプロジェクトの目的は、収入増に加えて家族や集落で安価な動物性タンパク源を確保することにあります。ラオスの人々はお米を驚くほどたくさん食べますが、タンパク質はあまり摂取していません。ここでは人々の生活を多面的に見て、収入増加よりも食生活の改善を重視していることがわかりました。

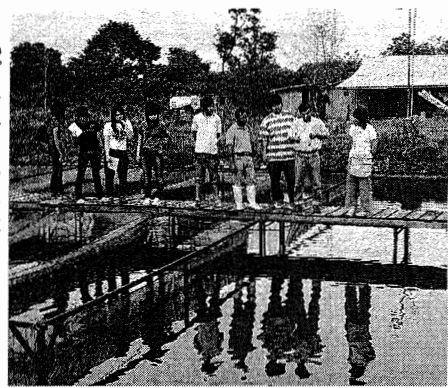
日本を代表するNGOの一つであるSVAは、東南アジアにおいて長い活動歴を持っています。1979年のインドシナ難民発生を契機に発足した「曹洞宗東南アジア難民救済会議」を前身とし、1981年に設立されました。SVAは開発協力を通じて第三世界の民衆と連帯し、すべての人々が自由と平等の中で「共に生き、学ぶ」社会の実現を目指しています。

最初、子供たちが好きな時に来て、好きなことが出来る子供の城」という施設を見学しました。夏休み中だったこともあり、100人以上の子供たちが工作や読書、楽器の演奏、さらには機織りに夢中になっていました。子供同士で本の読み聞かせをしたり、発表会に向けてラオタンスの練習をしたりと、ここが互いに友達をつくる場にもなっています。

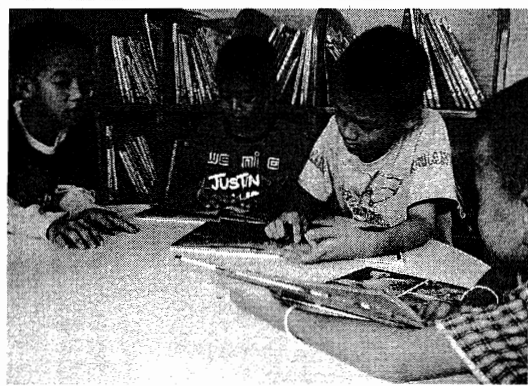
ラオスでは1年間に約50種類

このプロジェクトの目的は、収入増に加えて家族や集落で安価な動物性タンパク源を確保することにあります。

サンタクリット語の「ジャンティ」をその名称としていることからも分かるように、仏教的



焼き畑の代替えや安価な動物性タンパク源の確保としてJICAが取り組む魚の養殖プログラム



SVAの「子供の城」で楽しそうに本を読む子供たち

ラオスでは1年間に約50種類